

夢をかなえた、18組の住まいのカタチ

自分らしい家とは？ 「人とつながる」「夢を実現する」「趣味を極める」「自然と暮らす」、いま気になる4つのテーマ別に夢をかなえた18組を紹介。

人とつながる

1 放浪館・SERENDIPITY AMAMI

鹿児島県大島郡

奄美の緑が広がる図書室を、シマの子どもたちへ。



奄美大島にある「放浪館」は、渡伸一郎さんが自宅の敷地内につくった児童向けの私設図書館。壁画は大宮エリーさんが手がけた。



大宮エリー

Ellie Omiya

●1975年、大阪府生まれ。作家、映画監督、ラジオパーソナリティなどさまざまなジャンルの活動を行う。2012年から現代アーティストとしてのキャリアをスタート。19年2月に『虹のくじら』（美術出版社）を出版。



渡 伸一郎

Shinichiro Watari

●1948年生まれ。外資系総合商社の会長を務め、一年の半分以上を拠点である香港で過ごす。2019年4月に奄美大島の子どものために私設図書館「放浪館」をオープン。アートに触れながら読書を楽しむ場を提供している。



MY HOUSE
MY STYLE



放浪館のそばに置かれたスペインの作家、ジャウメ・プレンサの巨大彫刻作品。海を背景に堂々として見える。



放浪館という名前は、戸口出身の画家・保忠蔵（たもつちゅうぞう）が世界放浪の旅に出たことにヒントを得て付けられた。



丘の上に立つ鮮やかな色の建物が放浪館。図書館では絵本、児童図書から漫画まで幅広く取り揃えている。

「奄美大島では集落のことをシマと呼びますが、シマの子どもたちの未来を思いつくつたのがこの放浪館です。地方に住む若い人たちは一定の年頃になると都会へ出ていってしまう。でも、自分の生まれ育った土地のことを知らないまま安易な選択をしてほしくない。地元のことを深く知れば別の生き方を目指すこともできる。シマの子どもたちにたくさんの『ムズラシヤ』を体験してもらえたらという思いから放浪館をつくりました」

ムズラシヤとは奄美の方言でワクワク、面白さなどの意味。渡さんは、自分で構想のスケッチを描くほどの図書館に情熱を傾けた。約5000冊の蔵書も自ら選定。漫画の隣に歴史の本があるかと思えば、その隣には絵本、

緑に囲まれて読書する、 エネルギーあふれる空間。

島全体が国立公園に指定されている、自然豊かな奄美大島。島の北東部、龍郷町戸口は県道611号から東の海岸にまで広がる地域で、深い緑に抱かれるようにして小さな集落があるばかり。このどかな戸口のアウン海岸沿いに、テラコッタのような明るい色を纏った建物が立った。この春開館した、子どものための図書館「放浪館」だ。

オーナーは、戸口で育った渡伸一郎さん。外資系総合商社の会長を務め、普段は海外数カ所を飛び回る多忙な毎日を送っている。自宅は香港にあるが、日本で過ごす時のための別荘として、2013年に奄美大島に家を建設。その同じ敷地の中に、私設の図書館、放浪館を建てたのだ。なぜ子ども図書館をつくったのだろうか。

とあえてジャンル別に分けずミックスして並べたのは、本を見つけた楽しさを感じてほしいからだという。その思惑通り、あちらこちらに設置された本棚につられて、建物の奥へ、上へと移動する子どもたち。海風の香りに包まれるテラスをはじめ、階段でも、床に転がっても、どこで本を読んでもいいというのが渡さんの考えだ。

渡さんは子どもたちにもっとこの場所を好きになつてもらおうと、館内の壁に大きな絵を描くプランを立てた。声をかけたのは、作家として活躍する他、2012年からギャラリーや美術館で個展を続け、画家の活動も注目されている大宮エリーさん。2年前、青森の商店街で子どもたちと絵を描く大宮さんの写真を見て、渡さんは壁画制作を依頼した。大宮さんは言う。

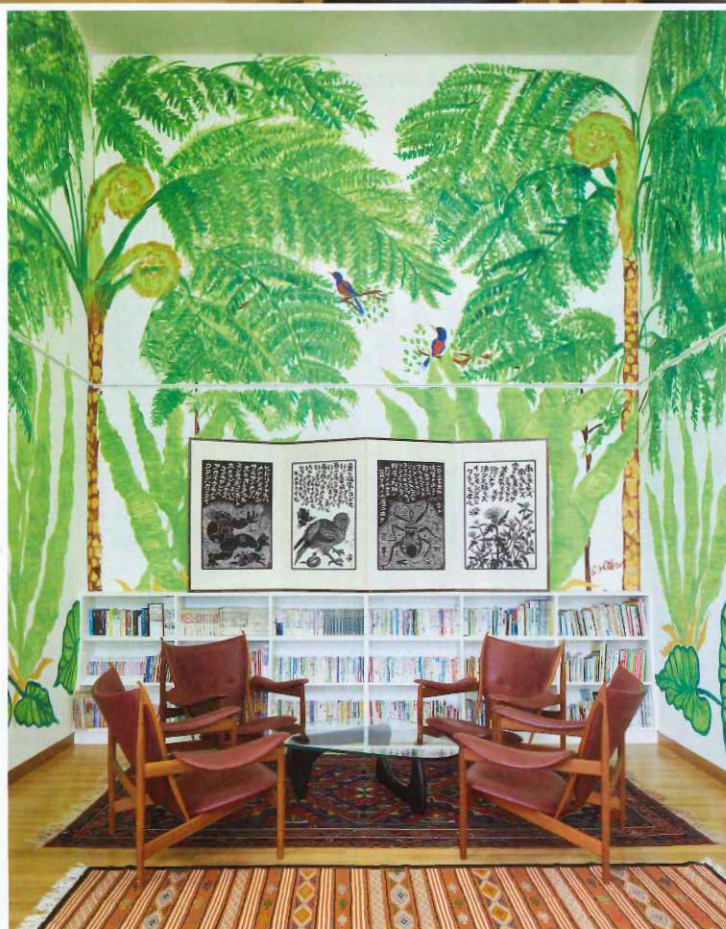
「渡さんからは子どもたちが喜ぶ絵を、と頼まれました。でもアートコレクターの渡さんも気に入る絵となると難しい（笑）。楽しく、本が読める空間を考えて、奄美の森を描くことにしました。植生の観察に加えて奄美のスプリットを感じるため、何度も訪れて多くの人と風景に出合いました」

約1週間かけて大宮さんは力強いタッチで図書館に森を、シアタールームに海を描いた。奄美の海にも2、3回潜ったと言う。「図書室は高さ7mでしようか、天井ぎりぎりまで描かれていたらワクワクするかなと思って」。奄美の植物が学べるよう固有種に絞り、毎日10時間以上も必死に筆を走らせた。壁にはヘゴシタやクワズイモがのびのびと葉や枝を茂らせている。完成時を渡さんはこう振り返った。

「初めて子どもたちが遊びに来た時、



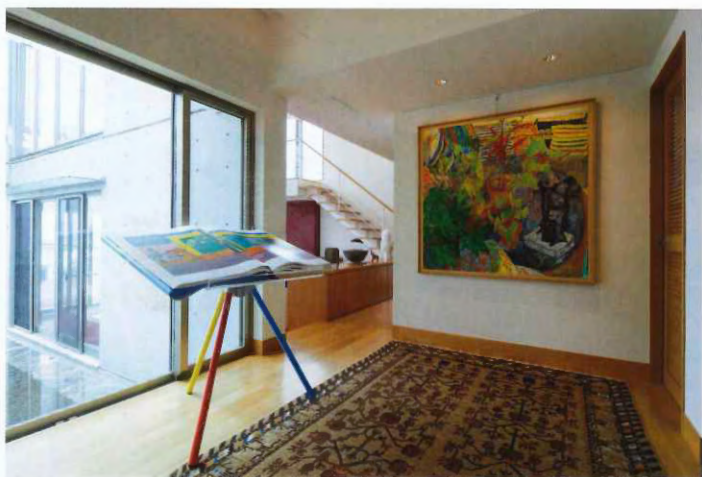
放浪館内のシアタールームは海が描かれている。大宮さんは実際に奄美の海に潜ってそのカラフルなさまを鮮やかに表現した。



本棚の上の作品は宮沢賢治の『雨ニモマケズ』を膨った江崎満の木版画。大宮さんが描いた壁画には奄美群島の珍鳥ルリカケスの姿も。



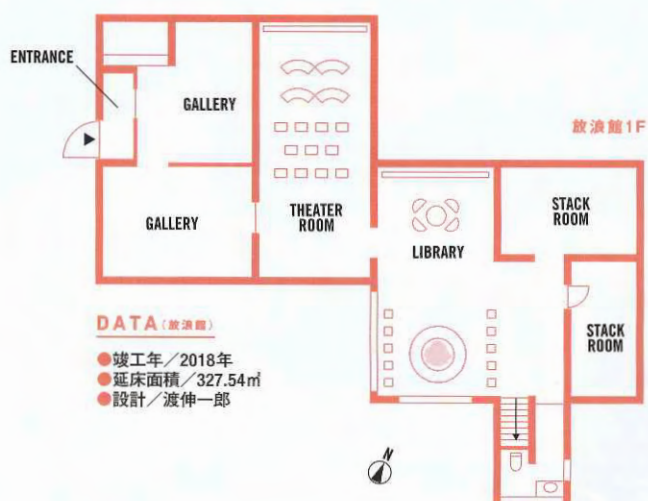
壁に描かれた植物は奄美大島の固有種ばかり。「本を読みながら、子どもたちが奄美の植物を学べるように」と大宮さん。



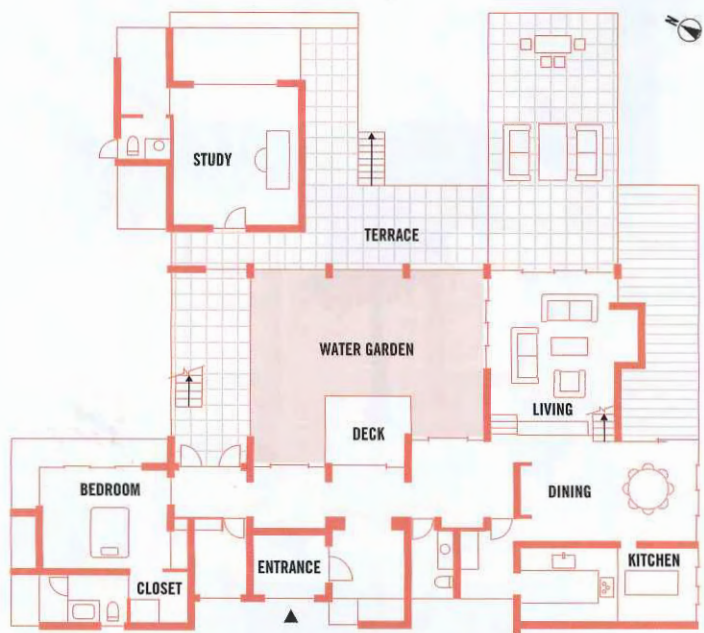
デイヴィッド・ホックニーの巨大画集は重さ35kg。開いておけば通りがかりに気負わず見られる。



母屋の中心にある水庭では、彫刻など立体的なアート作品も目を楽しませてくれる。



母屋のエントランスに飾られた絵はキューバの画家ジュリオ・ラルラースの作品。



ヘゴシタの絵を見上げたり、海の絵の前でカニのまねをしたり。本当に楽しそうだったんです。普段目にしている風景ですが、自然は島の宝であるということを、この絵は教えてくれます」

今年5月からは、奄美の自然や文化に触れるワークショップ「放浪館志塾」を開催。子どもたちは奄美の大切な価値を吸収していくことだろう。

一方、中庭を挟み、放浪館と向かい合っている母屋にはどんなこだわりがあるのだろうか。こちらも渡さんが計画を主導。大胆にも家の中心に水庭をつくり、その周りに部屋を配した。階段裏とその接する壁面を赤で塗り、レッドソール®で有名なクリスチャン・ルブタン®のハイヒールのように見えることを狙うなど遊び心もある。

「同じ場所でも、視点が変わると違っ

たものが見えるでしょう(笑)。家にはサプライズがないと面白くない」

また水庭周辺にはスペインの芸術家、ジャウメ・ブレサの彫刻作品「ルーツ」や、渡さんの友人でもあるジョイ・ブラウンのブロンズ像が置かれ、玄関やダイニングにはジュリオ・ラルラースの絵画がかかるといった具合で、あらゆるところにアートがある。アートと向き合うことで、心にゆとりができ、生活も楽しくなってくるのだという。

現代アートに豊かな自然。奄美の家は、それだけで十分満たされた環境といえる。しかし、渡さんは家の敷地を開放して子どもたちを迎え入れ、シマの未来に続く場を生み出した。生まれ育った奄美を愛し、守り、伝えようとする渡さんが考えた、究極の家づくりがそこにある。

山と海に囲まれたロケーションに立つ母屋。山の斜面から浮遊するように張り出したテラスから、眼下に広がる景色が見渡せる。



リビングにもアートがたくさん飾られている。正面の壁にかかる作品は、ジュリオ・ラルラースの宇宙空間に浮かぶボートの絵。



pen

with New Attitude

7 1

2019 No.476
特別定価 700 yen

建わ てが た 家 ま ま 。に



第2特集

ミラノ・サローネ
TOPICS 10